

# 芸術的回想

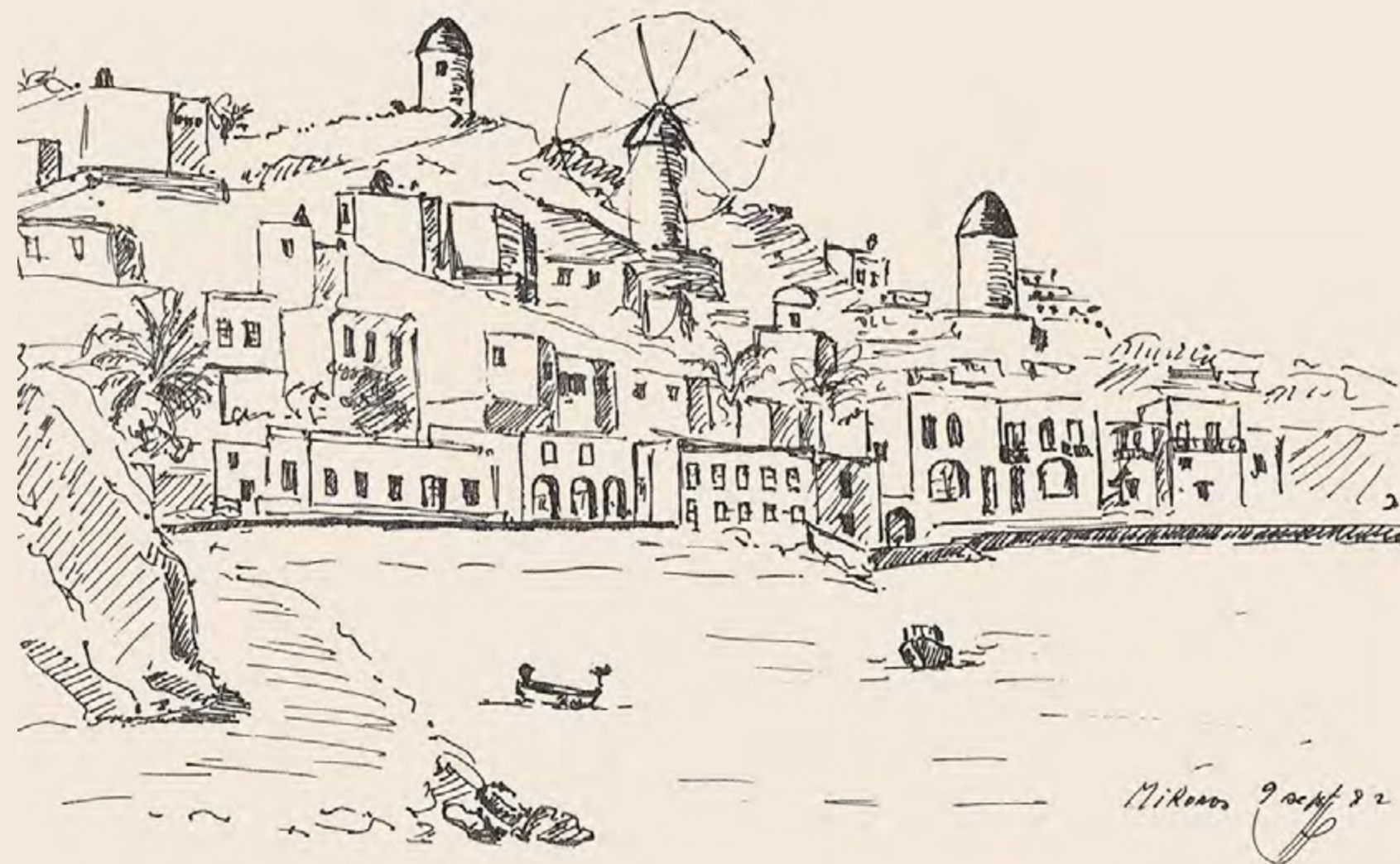
パテック フィリップの歴史資料を構成する書籍や文書の中には数多くの宝物があるが、おそらくアンリ・スターンが家族や友人のために編纂したアルバムほど魅力的で直接的なものはない。アンリ・スターンにとってスケッチと絵画が、いかに重要であったかを示す、彼の作品の例をいくつか選択し、そこに隠された芸術家像を明らかにする。

文 ニコラス・フォークス



[当ページ]  
アンリ・スターンは、娘のフロレンスに宛てた手紙の内容をこれらの鳥(上)の囀りになぞらえるなど、手紙に活気あるスケッチを添えることがよくあった。1991年にアンリ・スターンに

よって編集されたアルバム(下)は、イラスト入りの手紙、デッサン、水彩画を網羅している。[前ページ]  
アンリは、ギリシャのミコノス島(1982年)など、旅行した場所のスケッチも多数残した。



ひとりの若者が20世紀のロードス島の巨像のように世界を股にかけ、片足はヨーロッパの旧世界を、もう一方の足は大西洋を跨いだニューヨークを踏みしめている。これはレオナルド・ダ・ヴィンチの「ワイトルウィウスの人体図」を思い出させる構図のペン画(10ページ右上)である。筆者の見るところ、このデッサンで飾られた「パテックフィリップマガジン」の表紙は、これまでで最高のものであった。

腕を伸ばした人物の左手は、上に向けた手の平に、湖、山、スキー、ワインのボトルが置かれたピクニック・テーブルなど、スイスの生活の光景を載せている。彼の体の左側は水泳パンツをはいている。一方、残りの半分は、帽子、縞模様のネクタイ、サックススーツ、右手にブリーフケースという、1930年代のアメリカ人ビジネスマンお決まりのいでたちをしている。こちらの側には航空機とパテックフィリップの注文控え帳もある。ハンズ・ホルバインの絵画から隠された意味を読み取れるのと同様、このデッサンは、人生の岐路に立つ若者がいかなる選択に直面していたかを興味深く物語る。平和と自然に溢れたスイスの楽しい生活が彼を誘惑する一方で、新大陸でのビジネスマン生活がスーツの袖を強く引っ張る。

2つの世界の間にはたえず男はアンリ・スターンである。右下に筆記体で書かれた「H」と「S」が示すように、このデッサンは将来の選択に直面している、それほど悲劇的ではない時計業界のハムレットともいべき彼の自画像である。もちろん、われわれはこの後、何が起こ

るかをすでに知っている。アンリ・スターンは、その後20年をかけて、正念場の米国市場でパテックフィリップのビジネスを大成させた。元々彼は家族が営む文字盤会社で彫金家として働くつもりであった。しかしアンリがまだ20代前半だった頃、叔父のジャンと父親のシャルル・アンリが、名高い時計メーカー、パテックフィリップを破綻から救うために同社の経営を掌握した。こうして若いアンリの人生は決定的に変わったのである。



しかし時計業界におけるキャリアを追求しつつも、彼は自分が受けた芸術家としての教育を決して忘れなかった。アンリ・スターンはかつて「私はいつも絵を描くことに情熱を持っていました」と語った。「そこで父は、伝統的な学校教育を終了した私を工芸学校に入学させました。ここで私は3年間、遠近法や、ディテールの描写、彫金や彫刻のテクニクを学びました。」これらの教えは、パテックフィリップ歴史資料のデッサンや



〔当ページ〕  
セント・ジョン島のクルーズ湾のこのスケッチを含む1990年のアルバムの中で、アンリは「私はヴァージン諸島で(中略)絵を描き続け、技術を向上させようと努めています」と書いている。

〔前ページ〕  
1941年にアンリがニューヨークから叔父に送ったデッサン(右上)は、アンリの言う通り「言葉にも増して私の心がいまだにジュネーブと共にあることを示しています。」1985年のサファイヤ湾のスケッチはアンリの妻に捧げられ、

「エリンの椰子の木」というタイトルがつけられている(左上)。アンリは、米国のスイス時計輸入業者ジャン・グレーフへの手紙に旅行中の自分のイラストを描き加えた(8枚のうち一枚、右下)。アンリはテクニクを練習するため馬をスケッチした(左下)。



*Et me voilà parti, la marmotte à la main, à travers la grande Amérique, pour conquérir la liberté et, qui sait, la Fortune!!  
Le premier voyage fut un succès.*

*Pour terminer cette petite histoire, mon cher Jean, je vous remercie encore une fois du fond du coeur pour l'amitié sincère qui vous m'a toujours si souvent prouvée par vos précieux et avisés conseils.  
Bonne finnée, que vos desirs se réalisent et que Dieu vous protège.  
Henri.  
décembre 1942.*

アンリ・スターンはかつて「私はいつも絵を描くことに情熱を持っていました」と語った。



水彩画の宝庫が証明しているように、生涯にわたって彼のものであり続けた。これらの注目に値する一連の作品は、視覚的な自伝であり、繊細で豊かな内面生活に恵まれた人物像を明らかにしている。アンリは、家に宛てた手紙にデッサンを添えることが多く、ニューヨークの生活に基づいた、現代の装飾写本ともいうべき小さなシールを描き加えた。最初の結婚で生まれた末の娘、フローレンスに宛てた2羽の鳥の囁りになぞらえた手紙(9ページ)は特に感動的だ。彼のイラスト入りの手紙は家族以外にも送られた。尊敬する同僚やパートナーもこれを受け取った。米国のスイス時計輸入業者ジャン・グレーフにはとりわけ温かく親密な手紙を送った。1943年の新年の幸福を祈り、「貴殿の夢がかない、神のご加護がありますように」と締めくくっている手紙には、「新しい冒険、そしてもちろん新しい市場を求めて荷物を持ち、際限なく長い米国の列車の脇をとぼとぼと歩いていく自分のイラストが描かれていた。

1959年にジュネーブに戻った後、彼の美的・芸術的感性は、当時のきわめて創造的なデザイン、中でも最も記憶に残るジルベール・アルベールの創作品とゴードン・エリプスの多様な装いを通じて発揮された。とりわけ七宝細密画家シュザンヌ・ロール女史にパテックフィリップのための創作を依頼するなど、彼が自らの愛した業界の創造的遺産を守るために、多大な貢献をしたことを忘れてはならない。アンリ・スターンは生涯を通じて絵を描き、80歳の誕生日に家族や友人のために自分のデッサンや絵画のコレクションを出版した。彼は「妻のエリンと私は、本書が皆さんへの素敵な記念品になることを願っています」と書いている。このコレクションには、彼の生涯におけるさまざまな時期の作品が集められている。馬の絵(馬を描いた19世紀後半の巨匠トウルルーズ・ロートレックやエドガール・ドガからインスピレーションを得た可能性)がある。1930年代はじめて騎兵隊で兵役に就いていた時のものである。その他にはイラスト入りの手紙、人体デッサン、ヨット旅行中のスケッチ、そして晩年にはヴァージン諸島の風景などがある。米国在住の20年間、アンリは頻繁にカリブ海へ航海し、セント・トーマス島やセント・ジョン島には北米と南米を往復する旅行中に定期的に立ち寄った。晩年には、日々のビジネスは息子のフィリップに任せ、セント・トーマス島に行き日光浴をしたり絵を描いたりした。しかしこの椰子の木に包まれた楽園の島でも、アンリはパテックフィリップと強い絆で結ばれ、セント・トーマス島でのノーチラスの販売の伸びを定期的にジュネーブに報告した。時計業界での生涯は終えたかもしれないが、彼独自の「ウィトルウィウスの人体図」で描いた若い頃のイメージに忠実に、彼は大西洋を跨いで新旧両世界に足を踏みしめた男であり続けた。

オーナー: エリア マガジン、エキスト ラーにて、この記事の関連コンテンツを掲載しています。QRコードからぜひご覧下さい。 [patek.com/ja/オーナー](http://patek.com/ja/オーナー)

